

歴史の構造

神 武 庸 四 郎

目次

はじめに

第1節 始元的考察

I 「者」と存在

II ワイル図式

第2節 弁証法という形式

I 「事実としての歴史」と「存在としての歴史」の弁証法

II 弁証法の形式化

III 否定の論理

第3節 「無限」を求める「者」の立場

I 「無限に連続する運動」

II メタカテゴリーの意義

第4節 無から構造へ

I 主語と述語——構造の形式——

II 無の論理

III 「無限」への道程

はじめに

歴史の構造をつきつめて問題化しようとするとき、どうしても触れなくてはならないのが歴史 (Geschichte) という概念の構造である。その内容を構成しているのは、λόγοςを含む「出来事 (Geschehen)」である。歴史上多くの論者によって提示されてきたいろいろな歴史哲学の主題のひとつはこの対象の存在論的解明であった。このように盛んに論じられてきたとはいえ、その事実は必ずしもこの主題が十分に検討されてきたことを意味しているわけではない。

当面の関心事はこの厄介な概念の構造を分析し、それによって歴史一般の構造分析から導かれる諸成果を補強することにある。この課題を考究するにあたって、拠り所として活用したのは三木清の『歴史哲学』であった。この作品には多くの欠陥が含まれているが、それを補ってあまりあるほどの深い洞察がそこには満ち溢れている。

とはいっても、もちろん、三木の到達した水準に比べると、本稿で達成されている歴史認識のレベルははるかに高い。そうした高みから反省を試みたとき、三木の哲学的試みは改めて評価されるべき多くの論点を含んでいるというわけである。また、その限りで彼の作品が取り上げられているにすぎないのである。

第1節 始元的考察

I 「者」と存在

[1] 基礎カテゴリー

まず、議論の起点となる基本的カテゴリーはつぎのように構成される。

(1) 「者」

「者（しゃ）」は規定する（bestimmen）とともに規定される。

「者」は、たとえばドイツ語の接尾辞 -er に含まれている。しかし、後者は「者」と「者」の外化した物（道具）との両方を意味しているから、「者」を含みつつ、同時にそれから大きく逸脱している。

(2) 規定される「者」

「者」を規定するのは、まず、多様なカテゴリー、すなわち、一般、普遍、特殊、個別、等々である。一般「者」も個別「者」も方向を異にしてカテゴリーを超越する。とくに個別「者」は「現存在」から「実存」への方向を辿る。

(3) 規定する「者」

規定する「者」は、まず、行為である。そこに生成するのは行為「者」（Tatsache）としての所作である。つぎに規定する「者」は行為なき「者」であって、それは射である。射は純粋な知を産む根源的作用としての意識を担う。射は、フッサールのいうように、意識を媒介にした能作（Leistung）という機能と成果を創りだす⁽¹⁾。能作と所作との結合は存在を産む。

(4) 「者」と存在

「者」を存在と同一視しているのは狭隘な存在論的立場である。三木清の表現にたとえば、「者」は存在の根拠であり、存在の環境を創造する⁽²⁾。存在の面と異なる「者」の面が現れる結果として、環境の存在が確定する。
[2] 環境としての自己

存在の面では自己は常に自己である。すなわち、自同律が成り立つ。しかし、「者」と存在との区別によってそれは自明ではなくなる。自殺は存在としての、環境としての自己の「者」としての自己による否定である。

また、埴谷雄高のいう「自同律の不快」とは、文学的感性によって把握された「者」と存在との絶望的な区別⁽³⁾にほかならない。

ところで、自殺が成立するためには、「者」は生という規定性を獲得しなくてはならない。「者」は「生者」となる。『全死者と全生者との共存・共生・共闘』の構造と動態としての世界史像の形成」を唱えた歴史学者上原専禄の方法態度は彼の研究者としての姿勢を切実かつ大胆に確証する方向を示してはいたが、しかしなお彼はもっと根源的な立場に基づいて「歴史意識」の根底に「生者」を置くべきであった。⁽⁴⁾三木清の用語法にならなければ、「生者」は「事実としての歴史」を創出する「事実」にはほかならない。「生者」はまた消極的な無であると同時に積極的な無でもある。それは存在一般に対する「事実」なのである。

[3] 零時間存在としての生者——時間の創造——

ここで「生者」という規定をさらに展開することにしよう。そのばあい、「運動」という表現が多くの問題を孕んでいることは確かであるが、当面私はその言語表現上の「通俗」的意味にそくしてその言葉を用いることにする。さらに「連続」や「無限」という言葉についても同様の約束をしておく。

さて、「生者」は「いま」を生きている。その限りで彼は時間をもたない、あるいは零時間をもつのである。このように零時間存在であること、あるいは零時間存在としての無が、対象としての人間（「者」）および人間の意識する対象（物）が運動していることの根本的規定である。ここで注目すべきことは、零時間存在としては「者」は物と同一化するという点である。「者」は物として無である。生物も無生物も物として普遍的な存在「者」となる。この点は、後述のワイル図式によって分析されることになる。

ところで、類比的ないい方をすれば、零時間存在を「原点」として時間

歴史の構造

は「測定」される、つまり量化されるのである。したがって、零時間から測られて運動を止めたときまでの時間をもつ対象は静止していることになる。論理的に運動は静止に先行させられなくてはならない。したがって静止は特定の運動状態を示している。また、対象は静止しているから時間をもつのである。

このばあい、時間の指定されてしまった対象こそは歴史的対象にほかならない。ことに人間は過去に向かって時間を量り、量られた時間を過去の一時点（たとえば、キリストの生誕時点）から改めて測るのである。すなわち「現在」の進む方向に、いわば双対的に時間を測定するのである。測定の契機が入ることによって時間は双対時間となる。

ここで「双対」を含めた「対の論理」について付言しておく。いわゆる2値論理のことを、あえて「対の論理」とよぼう。その理由のひとつは、2値論理に対して「n値論理」や「多値論理」をいきなり想定することの非論理性を明示したいからである。いくつかの事例を挙げておく。第一に、逐次的な有限の論理構成。2値論理から3値論理、4値論理、5値論理、というような逐次的論理構成は「自然」である。まさに順序数の構成と同様である。ここでは、「多」や「n」は有限的なものと想定される。「真」と「偽」との間を実数の区間のような「無限分割」に対応させてはならない。これは排中律の安易な容認に繋がるからである。第二に、2項関係(⊗)。逐次的な結合(推移律)によって3項関係、4項関係等々が得られる。たとえば、

$$x \otimes y \rightarrow (x \otimes y) \otimes z \rightarrow ((x \otimes y) \otimes z) \otimes u \rightarrow \dots$$

という形にまとめられるだろう。第三には、ある種の「否定」の順序が考えられる。たとえば

$$\neg \rightarrow \neg \neg \rightarrow \neg \neg \neg \rightarrow \dots \rightarrow \neg^n$$

といった具合である。この考え方は弁証法の形式化のところで再び取り上

げられるだろう。第4には、順序対の逐次結合が挙げられる。たとえば、

… (((((,),),),),) …

というように、

これらと同様に、「双対」に対しても逐次的論理構成が必要である。たとえば、対象○に対して、その双対をとることを◎で示せば、○→◎→◎◎→◎◎◎→……という順序がえられる。形式的にはこのような図式が双対に対して当てはまるだろう。ここに出てくる◎、◎◎、等は測定主体の重層化を示している。

- (1) Edmund Husserl, *Formale und Transzendente Logik: Versuch einer Kritik der logischen Vernunft*, Halle, 1929, S. 253, 参照。
- (2) 三木清「歴史哲学」(『三木清全集』[岩波書店, 1967年]第6巻, 所収), 第2章などを参照。
- (3) 彼の散文詩「不合理ゆえに吾信ず」(『埴谷雄高全集』[講談社, 1998年]第1巻, 所収)の至る所に散見される詩人の「不快な」魂の叫びを味読せよ。
- (4) 彼はいかなる歴史学者よりも切実な思いを込めて歴史主義の立場を突き詰めてはいるが、歴史主義そのものを超克することはついにできなかった。晩年における彼の精神の軌跡を浮かび上がらせている小品集として、『クレタの壺』(評論社, 1975年)が参照されるべきである。とりわけ、本書の最後に掲載されている自伝的小論「本を読む・切手を読む」は熟読を要する。

II ワイル図式

時間のなかに存在する「者」の形式的な規定を試みるのが本節の課題である。そのために、まず、いわゆる「ゼノンの逆理」を手がかりにして「運動」と「連続」の概念を予備的に吟味し、続いて、とりわけ「運動」の表象を造型的に示す図解を導入して問題の輪郭を描こうと思う。

[1] 「ゼノンの逆理」の構造

歴史の構造

アリストテレスによれば、いわゆる四つの「逆理」をはじめて明らかにしたのは古代ギリシャのゼノン (Ζήνων) という人物であつたらしい。アリストテレスの要約にしたがってそれらを順次列挙しておこう。第一は「移動するものは、目的点へ達するよりも前に、その半分の点に達しなければならないがゆえに、運動しない」という「命題」であり「二分法」ともよばれている。第二の「逆理」はこうである。「走ることの最も遅いものですら最も速いものによって決して追いつかれないであろう。なぜなら、追うものは、追いつく以前に、逃げるものが走りはじめた点に着かなければならず、したがって、より遅いものは常にいくらずつ先んじていなければならないからである」。これは、しばしば「アキルレウスは亀に追いつけない」という表現で語られている。第三は「移動する矢は停止している」というものである。最後に、第四の「難問」は「競走場において、一列の等しい物塊の傍を、反対方向に、一方は競走場の終点から、他方は折返し点から、等しい速さで運動する二列の等しい物塊にかんするものである。この議論では、ゼノンは、半分の時間がその二倍の時間に等しい⁽¹⁾という結論になると思っている。」

さて、これら四つの「逆理」の論理的内容はいろいろの角度から整理されているが、ここでは各々の「難問」の検討に深入りするのを避け、当面の課題とかかわりのあるかぎり¹で論点を整理しておくにとどめたい。

「ゼノンの逆理」の解説は断念して、「移動する矢は停止している」「逆理」と「半分の時間がその二倍の時間に等しい」「逆理」とに示唆されている三つの論点——すなわち「運動」の「無限」分割、「連続」と「運動」との関係および「無限」の不「連続」分割と「連続」分割——だけを取り上げることにしよう。

(1) 「運動」の「無限」分割

矢の「運動」を「無限」に分割できると仮定する。換言すれば、その

「運動」をいくらでも小さく区切ることができるかと仮定する。このばあい、まずこの仮定自身がすでに矛盾を含んでいる。というのは、「運動」を「運動」しない対象に置き換えているからである。この側面から「ゼノンの逆理」を解釈する仕方もありえよう。たとえば、それを「点の運動」ないし「図形運動」の含む矛盾に還元する見解がある⁽²⁾。しかし、その見解は「運動」という無規定的な「危うい」概念を、しかも「逆理」にとって決定的な意味をもつ概念を不用意に持ち込んでいる。はじめから矛盾を含んだ前提によって矛盾を「論証」しようとしている点で、それはゼノンと同じ立場であるにすぎない。

ところで、この仮定のもとでは確かに矢は止まって「見える」。しかし、ここには一面的な事態の捉え方が介在している。というのは、人間の視覚を一定にした状態を仮定しているからである⁽³⁾。この仮定を取り去るとき、矢は止まっているかどうか不確定であろう。もし人間の視覚の「運動」を「同様に」「無限」に分割したとすればどうだろうか。たとえば、1万分の1に分割された視覚の「運動」を人間自身が感じることは、おそらく不可能であろう。ことによると、人間には感じられないとしても、矢は依然として「動いている」かもしれない。この「動いている」という状態こそは「連続」ないし「持続」といった言葉に置き換えられうるものである。そこでつぎに「連続」を「運動」に関係づけてみよう。

(2) 「連続」と「運動」との関係

いわゆる「 $\epsilon\delta$ 論法」を例にとろう。周知のように、「 $\epsilon\delta$ 論法」というのは数学的な「連続」の定義として一般的に使われている。「移動する矢は停止している」の論理に関係させてみると、それは結果的に、「連続」とは「移動する矢は停止している」ことである、と定義しているに等しい。これはまた「運動」の定義にも準用されうる。いわく、時間間隔 ϵ をどんなに0に近づけても適当な位置間隔 δ が存在し、それは0に等しくない、

と、記号的に表現すれば、

$$|\tau_m - \tau_n| < \varepsilon \rightarrow |F(\tau_m) - F(\tau_n)| < \delta$$

という具合になる。或る「運動」した距離（軌跡）と別の「運動」した距離との比較、すなわち、否定された一つの「運動」と否定された他の「運動」との対比によって「運動」が定義されているわけである。ここからは、命題を \mathcal{A} として、「 $\mathcal{A}, \neg \mathcal{A} \rightarrow$ 」という推論形式が出てくるにすぎない。

もとよりこの方法自体は正当な論理的根拠をもっている。なぜならば、それは「連続」を局所化した上で、何回も（限り無く）繰り返して適用可能な有限の手続きを提示しているからである。このやり方がヒルベルトの提起した「有限の立場 (finite Einstellung)」によって基礎づけられうることは明らかであろう。実際に、彼はベルナイスとの共著の中で「ゼノンの逆理」の深遠な意味に言及したのち「無限」の構造認識の方法にふれ「無限の個体領域自体は、構造によって、すなわちその領域の個体の間に成り立っている関係によってしか示すことはできない」と⁽⁴⁾いっている。ここで彼（彼ら）は、局所化された有限の手続きによってはじめて「無限」の構造分析が実行可能になると、主張しているのである。しかし、依然として「連続」自体は直接に規定されていない。

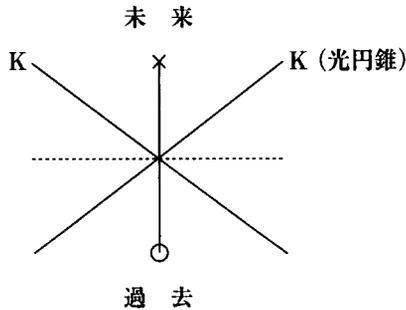
(3) 「無限」の不「連続」分割と「連続」分割

「連続」を線分に還元して「無限」に帰着させることは「無限」自体の性質を把握するうえで積極的な意味をもっている。その点からすると「半分の時間がその二倍の時間に等しい」という「逆理」は「逆理」以上の意義をもっているように思われる。というのは、その命題が「無限」の不「連続」分割と「連続」分割との差異を明瞭に表現しているからである。この「逆理」についてのサボー (Arpád Szabó) の解釈にしたがえば、カントールの集合論における「濃度」にそくして見たときには半分の長さの線分で表される「半分の時間 (=「持続 (duration)」)」は「倍の時

間)に等しい、ということになる。⁽⁵⁾ サボーが「持続」と表現しているところを「連続」に置き換えれば、半分の「連続」=倍の「連続」、さらに、半分の「無限」=倍の「無限」、という等式が成立する。これはゼノンの卓見であった。とはいえ、そこで「無限」が直接に規定されているわけではないことも事実である。

「運動」と「連続」と「無限」にかかわる以上三つの論点は、これらの概念のなかにある種の論理的な「堂々巡り」に帰着するような「矛盾した」構造が内在していることを教えているにすぎない。しかし、「現在」を[・]生きている「者」は「運動」と「連続」と「無限」とを[・]体験し、感じているはずである。われわれは、改めて「現在」から出発しなくてはならない。死ぬまで「運動」する「現在」を分析しなくてはならない。その手がかりを与えているのは、自然科学者ヘルマン・ワイル (Hermann Weyl)⁽⁶⁾の議論である。

[2] ワイル図式の基本形



この図はつぎのようにして描かれている。⁽⁷⁾ まず、点線によって示される横軸は空間の距離を表し、つぎに実線に沿った縦軸は時間を表すものとする。縦軸は1秒を単位とし、横軸は1秒間に光が移動する距離を単位としているが、これらは共に同じ大きさを表すものとする。これらの軸に対し

歴史の構造

て45度の傾きをもつように2本の直線を引くことができる。それらの直線は光円錐の軌跡を平面図に表示したものである。

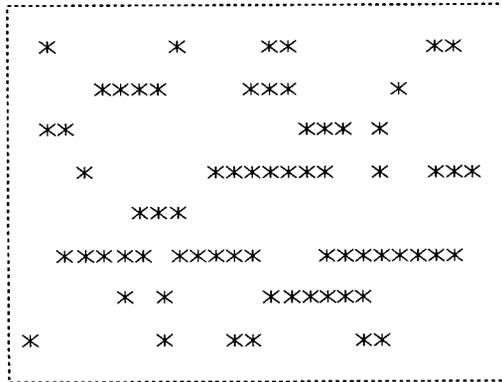
こうして作られた図——ワイル図式とよんでおく——からいくつかの主張を導こう。

- (1) 個別主体=人間は過去の或る時空点に生成し、未来の或る時空点で消滅する。
- (2) 物質についても同様のことがいえる（エントロピーの増大→分解）。
- (3) 底辺が無限大の開いた「過去三角形」と逆向きを開いた「未来三角形」とに示される場所以外には「存在」は不可能である。
- (4) (3) に示された以外の場所、すなわち左と右に無限大の底辺をもつ場所は、埴谷雄高のいう「虚体」⁽⁸⁾の住処である。

ワイル図式の無秩序な存在がすべての（人間を含む）存在の構造としての表現となっている。無数の物=存在が同じ「現在」を無時間的に担っているが、存在しなくなった物のワイル図式はその時点で消滅し過去の存在が残るばかりである。下図はワイル図式を \ast という略号で示して、あらゆる存在の無秩序な姿をイメージとして描いたものである。この図はそれ自体として無の構造表現の一類型となっているが、とりわけ「現在」の認識にとっても少なからぬ意味をもつように思われる。その点についていさ少し詳しく検討してみよう。

[3] 現在する「者」

「現在」こそは繰り返し反復される「連続」的な否定を通じて（個々の人間の個別的な死の連鎖を媒介にして）未来を創造し過去を歴史たらしめる。「現在」から過去への遡行は論理的には「順序数」を元へ辿ることに等しい。すなわち、数学者のいう「正則性の公理」が成り立つことを前提にして過去の起点に遡るわけである。そこにわれわれは必ず「空集合」(0)、すなわち——人類史であれ地球史であれ宇宙史であれ——歴史の始



まりを見出すことができる。記号列で示せば、

$$\forall x \in 0 \in \{0\} \in \{0, \{0\}\} \in \{0, \{0\}, \{0, \{0\}\} \in \dots \text{「現在」}$$

という形に表される。このばあい、0は左に向かって否定的契機を表し（あらゆる存在の否定）、右に向かって肯定的契機を表している。これと同じような形式化は、のちに「無」が再び論じられるときに用いられるであろう。ここでは、数学的順序構造と歴史との対応関係を明示するために援用されたにすぎない。

しかし、これだけでは歴史の順序を数学的構造——半群の構造——に置き換えただけであり、過去、現在、未来の概念的な識別が論理的に挿入されていない。前項に示したワイルの図式の「効用」はこの点を明確に表示することにある。⁽⁹⁾

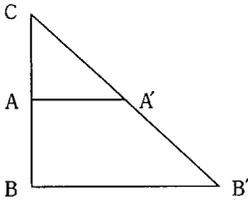
ワイルが図解しているように、現在という場所に在る——端的に現在する——物や者は物理的時空（間）においておのおの一点を占めているにすぎない。その一点とは「受動的過去」の光円錐と「能動的未來」の光円錐の共通する頂点である。現在する「者」としての人間は「事実 (Tatsache)」の担い手として行為する「生」であるから、その意味で「原史 (Urgeschichte)」である。⁽¹⁰⁾

人間は過去の時空座標で「生」と成り、未来の或る時空座標で必ず死ぬ。個人の起点と終点との間に現在が常に在る。個人はこのような限定のもとで現在しているので、ことに人間にとっては「受動的過去」は存在的過去（存在としての歴史）であり、「能動的未来」は行為的未来である。存在的過去と行為的未来との「接点」が現在であり、この場所に人間は現在しているのであり、したがって生きていく——生として行為している——のである。

- (1) 『アリストテレス全集』第3巻「自然学」（出・岩崎訳、岩波書店、1968年、258-259頁、参照）。
- (2) 大森荘蔵の論文「幾何学と運動」および「ゼノンの逆理と現代科学」（いずれも『大森荘蔵著作集』第8巻〔岩波書店、1999年〕、所収）を参照せよ。
- (3) この議論は「時間が今から成ると仮定することから生ずる」と、アリストテレスは論評している（前掲邦訳、259頁）。「歴史という構造物の場を形成するのは、均質で空虚な時間ではなくて、〈いま〉によってみだされた時間である」という20世紀の哲学者ベンヤミンの言明も、同様の観点を歴史の概念規定に引きつけて打ち出したものといえる（ヴァルター・ベンヤミン著〔野村修編訳〕『ボードレール他五篇』（岩波書店、1994年）、341頁、参照）。しかし、そうするとこんどは「今」それ自体の根拠づけが問題となってくる。
- (4) D. ヒルベルト、P. ベルナイス著（吉田・淵野訳）『数学の基礎』（シュランガー・フェアラーク東京、1993年）、20頁。ヒルベルト自身は「無限」を「頭の中」の「理想的」な存在として「想定」し、有限な思考の内容と形式に意味を与える「働き」をするカテゴリーと見なしていたようである。彼の表現を引用すれば、「無限を用いた操作は有限によってはじめて確証されうる」のであり、「数学記号と同様に論理記号からあらゆる意味を取り去って説明をするとすれば、必然的に、論理計算の式もまたそれ自体としてなにもものをも意味せず理想的な命題になる」のである。また、「理念」について彼は「無限に残されている役割は——カントの言葉にしたがって、理念をもって、あらゆる経験を凌駕して全体性の意味で具体的なものを完成させる理性的概念と解するな

らば——むしろ理念のそれにすぎない」とも語っている。詳しい論旨にかんしては、David Hilbert, 'Über das Unendliche', *Mathematische Annalen*, 95 Bd., 1926, SS. 176, 190, 参照。

- (5) A. K. サボー著 (伊藤・中村・村田訳)『数学のあけぼの——ギリシアの数学と哲学の源流を探る——』(東京図書, 1976年), 71-79頁, 参照。彼の解



釈を表現しなおせば、つぎのようになる。左の直角二等辺三角形 ($\angle B = \text{直角}$, $CA = AB$, $CB = BB'$) において $2AA' = BB'$ と考えてゼノンの「矛盾」を指摘したのがアリストテレス一派の見解であり、他方、ゼノンは $AA' = BB'$ と主張したのである。ここで下線は、集合としての線分の「濃度」を示すものとする。

- (6) ヘルマン・ワイル著 (菅原・下村・森訳)『数学と自然科学の哲学』(岩波書店, 1959年)の第2部第1章, 参照。
 (7) 同, 113頁, 参照。
 (8) 「虚体」についての生前最後のまとまった叙述として『死霊』九章(講談社, 1995年)の参照を求めておく。
 (9) ワイル, 前掲書, 105-115頁, 参照。
 (10) 三木清にとって「原史」は「事実としての歴史」を意味していた。前掲「歴史哲学」, 25頁, 参照。

第2節 弁証法という形式

「者」が未来に向かって「運動」するばあいの形式はいわゆる有機体説によっては与えられない。というのは、有機体説なるものは現在と未来とを「連続」して把握しようとするので、現在としての未来と未来としての現在が「同値」化され両者を隔てる論理を展開する根柢がそこからは失われてしまうからである。このことは三木清によって説得的に論じられている。それでは、「者」の「運動」を規定する形式を与えるものはなんであ

ろうか。この問いに対して三木は、それこそ弁証法である、と断言する。私も彼の見解に同意してはいるのだが、しかし、彼の規定した弁証法によってその課題に応えることはできそうにないと、私は考える。そう結論づける前に、まず、彼自身の見解をまとめておこう。

I 「事実としての歴史」と「存在としての歴史」の弁証法

三木清のいう弁証法とはいかなるものであろうか。それは、彼自身の表現を用いれば、「事実としての歴史」と「存在としての歴史」の弁証法である。彼の要約的叙述を引いてみれば、つぎの通りである。

「事実としての歴史は自己の対立物たる存在としての歴史に於て自己を実現する。この場合それは過去の存在としての歴史に結び付くことを通じて自己の存在を規定する。これらのことなしにはそれはみづからを発展せしめ得ない。その限りに於て存在としての歴史は事実としての歴史の発展形式である。然し存在としての歴史はどこまでも事実としての歴史の対立物であり、前者はやがて後者に対する桎梏に転化する。⁽¹⁾」

ここには歴史の内容をなす「事実としての歴史」の「対立物」として「存在としての歴史」が位置づけられている。後者は前者の「形式」、とりわけ「発展形式」をなしている。この議論は彼の別の著書『社会科学概論』では「存在と事実の弁証法」と名づけられている。⁽²⁾ 名称はともかく、この弁証法はヘーゲルにおける「有と無との弁証法」に置き換えられうる。そのばあい、「有と無との弁証法」は「存在と存在の根拠との弁証法」と解されるべきである、というのが三木の論点である。この解釈に基づいて彼はマルクスの規定した「生産諸力」の概念を再構成しようとする。三木に

よれば、マルクスのいう「生産諸力」は「無」となる。「生産諸力」はまた「社会的分業」でもあるから、「社会的分業」をカテゴリー⁽³⁾たらしめるには「生産関係」の言葉が使われなくてはならない。三木のこの議論は注目に値する論点を含んでおり、彼の卓抜な洞察力を示すものである。というのは、「生産諸力」も、したがって「社会的分業」もそれ自体としてはカテゴリー⁽³⁾たりえないという論理がここには伏在しているからである。この論理展開はメタカテゴリーを構成する必然性を示唆しているのである。このことは後に再び論じられるであろう。

ところで、「事実そのものが否定的なものを自己の契機とする⁽⁴⁾」から、「存在としての歴史」は絶えず否定されなくてはならない。ディルタイの用語を用いれば、「表現」は絶えず否定され、したがって「表現」された「体験」（「存在としての歴史」）は常に「体験」そのものに回帰しなくてはならない。とすれば、「存在の歴史性に対する最も根本的な且つ最も包括的な表現⁽⁵⁾」としての弁証法も否定されうるであろう。彼の要約のうちにある「発展」という言葉も「表現」に置き換えられなくてはならない。

なぜこうになってしまうのであろうか。その理由は、三木が「発展」や「弁証法」を存在の絶対的な形式として規定しようとしたからである。それらは無に還元されるべき一つの相対的な形式にすぎない。次項では、形式化の手段としての数学的構造との対応を意識しつつ両者の批判的な吟味を試みることにしよう。

(1) 三木、前掲「歴史哲学」、94頁。

(2) 「社会科学概論」（『三木清全集』第6巻、岩波書店、1967年、所収）、参照。

(3) 「歴史哲学」、96-7頁。

(4) 同、93頁。

(5) 同、95頁。

II 弁証法の形式化

「発展」という言葉は実に多様な意味を含んでいる。三木の挙げている例を列挙すれば、「運動 (κίνησις)」、「継起 (Nacheinander)」、「連続」、「成長 (Wachstum)」、「諸変化の系列」あるいは「統一的な過程」等々である。このばあい(1)に注目される表現は、「運動」と「継起」ないし「連続」である。それらは「発展」の諸局面を的確に表現していると考えられる。しかも、いずれの表現にも目的論的な構造は含まれていない。弁証法はこれらの表現を、もちろん曖昧な形においてであるが、すべて包括していると見なされる。形式化すれば、「運動」の契機となる矛盾、すなわち $(A \wedge \neg A)$ が、まず定立され、続いてこの否定として、 $\neg (A \wedge \neg A)$ 、あるいはその「同値」的表現として $\neg A \vee \neg \neg A$ が出現する。ここには「連続」してあらゆる対象 A の二重否定が生まれる過程が形式的に表示されている。つまり、 $A \rightarrow \neg \neg A$ 、という形式である。もちろん、このばあい、一般的には $A \neq \neg \neg A$ でなくてはならない。まとめていえば、矛盾の否定は不確定の対象 ($\neg \neg A$) を「連続」的に生み出す「運動」を惹起する、という形式が弁証法である。しかし、矛盾が「連続」的に出現する形式を、これと「同値」な——通常、弁証法的とはいわれない——別の形に表現することも可能である。いま、数学者ゲンツェンの論文にしたがってある種の記号法を想定しよう。(2) まず、命題 \mathfrak{A} (Aussage) の存在を仮定する。このとき、記号 \rightarrow を「ならば」と読み替えるならば、 $\mathfrak{A} \rightarrow \mathfrak{A}$ が成り立つ。それは、論理的に同値な置き換えにより、 $[\mathfrak{A}, \neg \mathfrak{A} \rightarrow]$ 、となる(大括弧は論理記号ではなく、範囲を識別する記号である——以下同様)。このとき大括弧内の記号列は矛盾を示している。これと対照的に、 $[\rightarrow \mathfrak{A}, \neg \mathfrak{A}]$ は排中律を意味する。かくて「ならば」は独立に矛盾を意味することになる。ここから帰納的な記号列の「無限」連鎖が生じる。すなわち、

$$\begin{aligned}
 &[\neg \mathcal{A}, \neg(\neg \mathcal{A}) \rightarrow] \Leftrightarrow [\neg \mathcal{A}, \neg \neg \mathcal{A} \rightarrow] \\
 &\quad \neg \neg \mathcal{A}, \neg \neg \neg \mathcal{A} \rightarrow \\
 &\quad \neg \neg \neg \mathcal{A}, \neg \neg \neg \neg \mathcal{A} \rightarrow \\
 &\quad \cdot \qquad \qquad \qquad \cdot \qquad \cdot \\
 &\quad \cdot \qquad \qquad \qquad \cdot \qquad \cdot \\
 &\quad \neg^n \mathcal{A}, \qquad \qquad \neg^{n+1} \mathcal{A} \quad \rightarrow \\
 &\quad \cdot \qquad \qquad \qquad \cdot \qquad \cdot \\
 &\quad \cdot \qquad \qquad \qquad \cdot \qquad \cdot
 \end{aligned}$$

となる（ \neg の回数 n は或る自然数を示す）。

いずれにせよ、これらの表現形式が全体も目的も措定しない「連続」的「運動」形式であることは明白であろう。

ところで、弁証法の形式をこのように捉えたとすれば、それは数学的構造に著しく近似してくるであろう。とくに、「連続」ないし「継起」という表現は数学的な「連続」の概念および「順序」の概念に近いものと観念される。しかし、「連続」にせよ「運動」にせよ、それらを普遍的な論理に基づいてどのように規定すべきかということになると、既述の「ゼノンの逆理」といったアポリアが登場してくるので、数学的構造との近似性は直ちに当面する問題の形式化の可能性には繋がらない。さしあたり、弁証法を仮説として「発展」概念の含む普遍的内容を明らかにすることで満足するほかはない。他方、ここで明瞭になってきたことは「発展」概念の含む目的論的構造を弁証法はもっているわけではないという点である。換言すれば、「発展」なる表現に纏わる曖昧さ——それは目的論的な含意ゆえに生じてくるのであるが、そうした曖昧さ——が弁証法には形式的に存在していない、ということである。したがって、目的論的構造への「愛着」を捨て去るならば、「発展」と弁証法とを結びつける必要はまったくないのである。あるいは、そもそも「発展」といった「思考」様式ははじめか

ら除去されてよいのである。むしろ、「運動」や「継起」ないし「連続」の内容こそが論理的に解決されなくてはならない。構造の「運動」, 「継起」的構造, 「連続」する構造といった構造の類型が分析されなくてはならないのである。しかし、構造の基本的な「運動」形態——循環と反復——は、二重否定を除去する論理を否定する形式的手続きのなかにすでに与えられている⁽³⁾。この点について改めて規定しよう。

(1) 三木, 前掲「歴史哲学」第3章, 参照。

(2) Gerhard Gentzen, 'Untersuchungen über das logische Schließen', I und II, *Mathematische Zeitschrift*, 39 Bd. (1935), 参照。

(3) 「運動」形態そのものの形式的な整理については、とりあえず、拙稿「構造と疎外」(『一橋大学研究年報: 経済学研究』40号, 1998年, 所収)を参照せよ。

III 否定の論理

なんらかの存在ないし構造を \textcircled{C} で表そう。いま、二重否定の循環性——いわゆる「二重否定の除去」($\neg\neg\textcircled{C} = \textcircled{C}$)——や排中律を認めない立場から否定の論理を考えると、つぎのような二通りの可能性が生ずるであろう。

[1] n重循環性

二重否定が循環を完結させるという想定を除去し、なおかつ否定の論理過程が循環性をもつときには

$$\neg\neg\dots\neg\textcircled{C} = \neg^n \textcircled{C}$$

が成立するだろう。この否定の過程を数学的にコード化する手段としては循環少数や有限巡回群などが考えられるだろう。もっと一般的には有理数によってコード化される。

このばあい、 \textcircled{C} にそくして見ると、 \textcircled{C} は可逆的時間のなかにのみ存在可

能である。 \neg を「順序」に置き換えてみれば、「正則性の公理」が成り立つということになる。

[2] 「無限」反復性

否定の論理過程が循環しないばあい、順序数を ω として

$$\neg\neg\dots\textcircled{6} = \neg^{\omega+\omega+\dots}\textcircled{6}$$

といった反復過程が想定される。循環の否定されたこの論理過程は、無限循環少数や無限巡回群やリミット・サイクル上の点の座標などによって表現されうる。すなわち、一般的に無理数によってそれはコード化される（と想定されている）。 $\textcircled{6}$ の規定のなかに不可逆的な時間はいっているときには、この表現が妥当する。それはまさしく「無限」の表現である。しかし「無限」そのものではない。「者」の到達できる可能性が示されないかぎり、「無限」は把握されえないからである。

いい方を換えるならば、「者」は「無限」を求めているのである。そして、そのことを通じて「連続」と「運動」もまた「者」によって求められるのである。

第3節 「無限」を求める「者」の立場

われわれは、改めて「無限」や「連続」や「運動」を問題としなくてはならない。「歴史」の「事実」性が「者」であること、したがって「歴史」の構造が「者」の構造に還元されうることは、これまでの行論からすでに明らかとなったように思われる。そこで、まず、これらの言葉が示している——あるいは示すことのできない——内容を、形式的な立場から限定しなくてはならない。この内容を、いくぶん標語的に「無限に連続する運動」として表そう。つぎに、その議論を踏まえて、カテゴリーによらずに「者」を限定する可能性を見出さなくてはならない。

I 「無限に連続する運動」

「無限に連続する運動」を「無限的に連続的な運動」と形式的に置き換えよう。このとき、その表現は「連続的に無限的な運動」、「運動的に無限的な連続」、「無限的に運動的な連続」、「連続的に運動的な無限」、「運動的に連続的な無限」と「同値」であろう。すなわち、この表現は

□的に□的な□

という形式に置き換えられるのである。ここでは、「無限」と「連続」と「運動」の区別はなくなる。しかも、これらの言語の表す内容はいかなる存在のカテゴリーによっても論理的に説明できない。なぜならば、これらの言語表現は、次項の議論を先取りしていえば、メタカテゴリーだからである。

或る特定の型の数の集合ないし類（クラス）について、或る無矛盾な、⁽¹⁾いわゆる「形式的体系 (formal systems)」が構成可能であるとする。また、別の集合や類についても、同じく無矛盾でそれとは独立の「形式的体系」が構成可能であるとする。このようにいろいろな集合や類に対して、その明確な内容上の限定をおこなうためにその都度「形式的体系」が構成されうるとき、諸「形式的体系」相互に矛盾する関係が生じるかもしれない。少なくとも諸「形式的体系」間に矛盾が存在しないという保証はないだろう。

ところで、このような「形式的体系」を構想するのは、ほかならぬ人間である。それが直接構想されるか、それとも機械を使って媒介的に構想されるかは、どちらでもよい。そのばあいに構想された「形式的体系」は若干の存在のカテゴリーを人間が或る形に組み立てた所産である。すなわち、「形式的体系」は主体の行為の所産であり、三木清流に言えば、「事実」の「存在」化である。数学者ゲーデルは彼の「形式的体系」を構想し表現し

た。彼は、「形式的体系」自身のなかに矛盾を含みうることを、あるいは矛盾を含まなくても或る命題とその否定のいずれをも証明できない命題の存在することを、証明し、他方では無矛盾な有限の「形式的体系」の存在を証明した。こうした「形式的体系」はある種の構造となる。すなわち、その内部で構成要素間に矛盾のない関係が成立している有限の集合となる。

このような有限の「形式的体系」から「無限」の「形式的体系」を導き出すことができるだろうか。それができるとすれば、そのことは有限な推論が反復して実行できることを意味しなくてはならない。もちろん、反復は循環を含んでいる。有限な「形式的体系」が反復する関係をもっているとき、それは「無限」を表現している。この「無限」を数学者ゲルハルト・ゲンツェンは「可能的無限 (potentielle Unendlichkeit)」と名づけている。ゲンツェンによれば、有限の言語で陳述できる「構成手続き」は「同種の手順にそくしてたえず新たな再構成の可能性をその手続きが包含していることによって、無限の数系列を産み出す⁽²⁾」のである。ここで規定されている「無限」が「可能的無限」である。しかし、このばあい「無限の数系列」を「まとまった」閉じた全体と考えることはできない。というのは、そのような想定はラッセルの二律背反を導くからである。むしろ、ゲンツェンは——われわれの言葉でいえば——思考の「連続」的な「運動」を「原則」化することによって、この二律背反を回避しようとしているのである。彼の規定はつぎの通りである。

「無限の全体は即自的に (an sich) 存在する閉じた (abgeschlossene) 全体 (現実的無限 [aktuelle Unendlichkeit]) として考察されるのではなく、もっぱら有限なものから連続して [immer weiter] 構成的に組み立てられうる生成的なもの [etwas Werdendes] (可能的無限⁽³⁾) としてのみ考察されるべきである」。

ここに示されたごとく、「可能的無限」は「有限なもの」の限りない「運動」それ自体なのである。しかし、このことは「無限」の存在を表現しているにすぎず、「無限」を普遍的な形で把捉したことを意味しない。

そこであらためてカテゴリーによらない表現の可能性を取り上げよう。

- (1) Kurt Gödel, *On Formally Undecidable Propositions Of Principia Mathematica and Related Systems*, Translated by B. Meltzer, Introduction by R. B. Braithwaite, New York, 1962, 参照。
- (2) Gerhard Gentzen, 'Die Widerspruchsfreiheit der reinen Zahlentheorie', *Mathematische Annalen*, 112 Bd. 1936, S. 522.
- (3) *Ibid.*, S. 524.

II メタカテゴリーの意義

フッサールの「本質直観」という用語に示唆されているように、直観は「本質」にまで即座に到達することができる。一般に言語もまた同様の働きをもっている。すなわち、言語は、そのよって立つ形式的構造（たとえば、自由半群）を超え、さらにはその構造を組み立てているカテゴリーをも超えてしまう。「連続」、「運動」および「無限」という「同値」な言語はこの適例である。そこに表現されている対象を「われわれ」は直観しているのだが、「形式的体系」にまとめあげる、したがって「存在のカテゴリー」化するのは容易でない。ことによると、不可能かもしれない。しかし、それらの言葉が指示する或る内容、形式化されえない内容が存在一般に関係していることは確実である。それらの言葉の「超言語」的な作用は、ハイデッガーが「実存範疇」と命名した用語の内容と共通性をもって⁽¹⁾いるので、あらためて、その作用をもつ言語表現をメタカテゴリーと名づけよう。

そこで、三木清の議論を吟味しつつメタカテゴリーによる「者」の限定

の可能性を検討してみよう。三木によって整理された「事実としての歴史」と「存在としての歴史」との弁証法的関係は以下の通りである。

「事実としての歴史」

「存在としての歴史」

超越的なもの

内容と形式

「生産力」

「生産関係」、社会

実体

現象（形式、関係、カテゴリ

ー）

矛盾を内在させる

「内在的矛盾」

目的なき目的論

目的ある目的論

「現在」

「現代」

端緒を定める

体系とその端緒

これらの比較によって問題のイメージは伝わってくるであろうが、それだけでは印象的な議論に終始してしまうだろう。そこでいくつかのテーマを個別に取り上げてみよう。まず、「全体」というものの構造である。「事実としての歴史」の立場からは「全体」は絶えず更新される全体である。たとえば、「永続革命」における「永続」がそれに該当するだろう。他方、「存在としての歴史」の立場からすれば「全体」は所与の全体である。「永続革命」における「革命」がそれである。すなわち、「永続革命」の「運動」を表す「永続」こそ「事実としての歴史」、——われわれの用語では「者」——である。まさに三木のいうように「全体は与へられたものでなく、却て事実としての歴史の立場からそれぞれの場合に新たに作らるべきものなのである。」⁽³⁾

つぎに、「今」の構造を考えよう。アウグスティヌスのように、「今」を

歴史の構造

「永遠」と見る立場は、「永遠」を神と同一視して「今」を捉え、そこから「過去」「現在」「未来」を分離して規定することに帰着するであろう。これに対して「今」を「瞬間」と見る立場は「現在」に「未来」を取り込む、したがって「行為する」ところに「今」の規定性を置いている。まさに「観想に於てでなく、行為に於て我々は永遠なものにつながる事が出来る」⁽⁴⁾のである。したがって「瞬間」＝「行為的時間」＝「事実的時間」という等置関係が成り立つ。この議論から、三木は「歴史的時間」と「行為的時間」との関係を、「存在」と「事実」との関係を、ハイデッガーのいう「範疇」と「実存範疇」との关系到類比させることになる。たとえば、つぎのように。

「範疇」		「実存範疇」
↓		↓
時間と空間	⇔	運 動
有限性	⇔	無限性
存 在	⇔	事 実
順序、距離	⇔	連 続（ないし持続）

しかし、このばあい「実存範疇」という言語表現をこのように用いることは誤謬であろう。それはメタカテゴリーに置き換えられなくてはならない。これについてはいくぶん説明を要する。DaseinのDaは、ハイデッガーによれば、存在の生起する場所である。Daはそれ自体として定型的であり月並みである生を産出するばかりであるが、Daからの主体＝人間の「投企」は「実存」に繋がる。とくに、Daの否定は「時間性」に含まれる「将来」の獲得という意味で弁証法的であり、したがって有機体的ではない。埴谷雄高の描いた「だあ、だあと弾んだ声をあげる」赤ん坊が想

起されるべきである。⁽⁵⁾ まさに人間は、赤子のような純粋性のもとで「Da, Da と」実存するのである。これに対して、人間は「現存在」を、したがって Da を対象化することができる。Da は「今」を生きているすべての人間の共時性を表している。「零時間存在としての無」という規定は、こうした意味における Da が対象化されている状況を表示している。そのばあい、Da はカテゴリー化の不可能な対象である。なぜならば、かかる「無」は「ロゴスにおいて種々の仕方で先ず語りかけられ次いで論ぜられる存在者の、ア・プリオリな諸規定」⁽⁶⁾をまったく包括していないところに対象としてのその存在の根拠を置いているからである。したがって、Da は超越的な対象=存在として「者」となる。それは「実存範疇」とは対立するメタカテゴリーである。この論点を踏まえて上の図解は再解釈されるべきである。三木のいう「事実」は実存に連なる場所であるから「運動」と「無限」と「連続」とは場所を異にする。すなわち、「事実」は「者」に置き換えられなくてはならない。ある種の順序関係が想定されているわけではないので、「者」と「無限に連続する運動」とは自由に置き換えられるだろう。したがって「者」は「無限に連続する運動」としても規定されうる。

メタカテゴリーとしての「者」を限定する「時間」がカテゴリーであることは、もはや明瞭であろう。そこで、アリストテレスの時間概念についての三木の解釈を見てみよう。⁽⁷⁾ 彼はアリストテレスのいう「今 (τὸ νῦν)」を「存在としての時間を特性付けるもの」として捉えている。これによって「今」と「瞬間」とを「存在」と「事実」との対応関係に帰着させようとしているわけである。しかし「今」を「現在する」ことに関係づけていえば、それは「運動」の根源を指示するであろう。そのときに「時間とは前後に従っての運動の数である」という「定義」の意味はどう解釈されるであろうか。明らかに「時間」そのものがカテゴリーであるというのがア

歴史の構造

リストテレスの立場だから、三木のように「事実的時間」と「歴史的時間」とを区別することはできない。むしろ「時間」をカテゴリーとして、「運動」をメタカテゴリーとして解釈するほうが無理のない議論を可能にする。なぜならば、「現在する」ことも「行為する」ことも、ともに「運動」に還元されうるからである。

- (1) ハイデッガー自身による「諸実存範疇 (Existenzialen)」の規定ならびにそれらと「諸範疇」との区別については、Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Sechzehnte Auflage, Tübingen, 1986, SS. 44-45, 松尾啓吉訳『存在と時間』(勁草書房, 1960年), 上巻, 78-79頁, 参照。
- (2) 三木清, 前掲「歴史哲学」133-150頁, 参照。
- (3) 同, 143頁。
- (4) 同, 166-167頁。
- (5) 埴谷雄高『死霊』, 講談社, 1975年, 348頁。
- (6) Heidegger, *a. a. O.*, S. 45, 邦訳, 上巻, 79頁。
- (7) 三木清, 前掲書, 171-172頁, 参照。

第4節 無から構造へ

前節においてはメタカテゴリーとしての「者」の内容が規定された。「者」は「時間」との区別においてメタカテゴリーとなるのであった。ところで、第1節において予備的に考察されたごとく、「者」は時間との関係においては零時間存在として「無」である。ここでは「無」が構造を創る過程を辿ることにしよう。当然のことながら、このばあいの構造は「者」を前提とし「者」に産み出されるので、歴史的構造である。歴史的構造の生成する道程を示すことによって本稿を締めくくろう。

I 主語と述語——構造の形式——

もっとも単純な構造の形式を取り上げよう。それを明らかにするために主語と述語との関係を考察する。いま主語を S, 述語を P で表そう。このとき,

『S は P である。』

という命題を考える。西田幾多郎はこの図式を根源的なところまで追求している。⁽¹⁾ それを私なりに再解釈しよう。

S は或る具体的な存在であり, P も同様である。たとえば, 『花は赤い』という命題がこの具体的表現になっている。ところで, 抽象化を進めるとその極限の形態において, S も P も存在ないし有という規定しかなくなるだろう。このとき, 『S は P である。』は

『存在は存在である (Sein ist Sein)』

という命題に帰着する。これはトートロジーであり, そこには主語と述語という関係によって結ばれた「存在」の構造が提示されてはいるものの, 命題としての意味は与えられていない。意味をもつ命題となるためには

Sein ist nicht Sein または, Nichtsein ist Sein

でなくてはならない。これらはそれぞれ,

Sein ist Nichts または, Nichts ist Sein

という表現と同等である。すなわち,

Sein \subset Nichts, または, Nichts \subset Sein, あるいは

存在 \subset 無, または, 無 \subset 存在

である。ここで, 「同等」を記号 \Leftrightarrow (\subset もとも書ける) で表すことにしよう。そうすると

無 \subset 存在 \Leftrightarrow 存在 \subset 無

となるであろう。さらに, いくつかの存在, 複数の存在は, 存在に或る限

定がおこなわれることだから、

いくつかの存在 \subset 存在

である。いくつかの存在とは、限定された存在相互の関係である。すなわち、

関係 \subset 存在

である。関係もまた存在であるから、いくつかの関係に対して

いくつかの関係 \subset 関係

という限定がおこなわれる。したがって

ひとつの関係 \subset 関係

である。

ここで議論を整理するために記号による置き換えをしておく。関係を ρ 、存在を ε 、無を ν と置き、これらの記号を自由に入れることのできる「位置」を τ で示そう。また、必要に応じて \subset を $*$ に、 \Leftrightarrow (\subset) を $=$ に置き換えよう。さらに、自明の関係 $\nu\subset\nu$ を ν というように簡略化する。以上の議論から、まず、 $\rho\subset\varepsilon$, $\varepsilon\subset\rho$, $\varepsilon\subset\varepsilon$, $\rho\subset\rho$, $\rho\subset\nu$, $\varepsilon\subset\nu$ 等々の関係がえられる。このとき、 $\varepsilon\subset\nu\Leftrightarrow\nu\subset\varepsilon$ より、

$$\varepsilon*\nu=\nu*\varepsilon \dots\dots\dots\textcircled{1}$$

が成り立つ。また、 $\varepsilon\subset\rho\Leftrightarrow\varepsilon\subset\nu\subset\rho\subset\nu\Leftrightarrow\nu\subset\nu$ より、置き換えによって

$$\varepsilon*\rho=\nu\dots\dots\dots\textcircled{2}$$

が成り立つ。同様にして

$$\rho*\varepsilon=\nu\dots\dots\dots\textcircled{2}'$$

がえられる。さらに、任意の結合 $*$ に対して

$$(\tau*\tau)*\tau=\tau*(\tau*\tau) \dots\dots\dots\textcircled{3}$$

が成り立つことは容易に確認されよう。たとえば、 $(\varepsilon*\rho)*\varepsilon=\varepsilon*(\rho*\varepsilon)$ などが導かれる。①、②と②'、③を、単位元の存在、逆元の存在、結

合法則、と読み替えるならば、「集合」としての $\{\nu, \varepsilon, \rho\}$ は群の構造をもつであろう。 ν を「自己」とよび、 ρ と ε とを「意識現象」の対象としたとき、「歴史的世界」は群構造を示す、というのが西田幾多郎の議論である。⁽²⁾ 彼のつぎのような発言から、このことは確認されるであろう。

「単位元素 [単位元……引用者] というのは、要素の何れに結合しても何らの変化を与えない。それは無というべきものである。しかし、そのものがその体系の中にあることによって、群が形成せられるのである。…… (中略) ……我々の自己というものは、我々の意識現象即ち要素⁽³⁾に対して無というべきものである。」

「世界というのは、そこに於てある物の何れと何れとが結合し (即ち相働き)、その結果として新な物が生じたとしても、それはまたその世界に於てあるものであり、それはまた物として働くものであるという如き、群論的体系でなければならぬ。」⁽⁴⁾

西田がなかば直観的に把握した「群論的体系」の評価はここでは保留しておく。むしろ私は、以上の議論がひとつの関係といくつかの関係を含む存在を構造とよぶことのできる根拠を示している、という点に注意を促すだけにとどめよう。しかし、このように定義された構造は形式的規定以上の内容を含んではいない。意味解釈を許容する内容を具えた構造の規定をおこなうためには構造の生成する根拠が論理的に示されなくてはならない。それがつぎの課題である。

(1) 西田幾多郎の講演記録「現実の世界の論理的構造」(『日本の名著』第47巻 [中央公論社, 1970年刊], 所収)を参照。

- (2) 「論理と生命」(『西田幾多郎哲学論集』II [岩波書店, 1988年], 所収),
参照.
(3) 同, 216頁.
(4) 同, 218頁.

II 無の論理

構造を生成させる無の論理を考察することがここでの課題である。

[1] 無の論理構成

記号論理学の用語法にならえば、無の論理はひとつの真理値しかもたない1値論理である。無ならば無であり、無の否定は無である。そこでは矛盾律は自同律に一致する。また、無は過程の始まりと終わりに生起し、しかも絶対的に生起する。無秩序や無関係は絶対的であり、秩序や関係は相対的である。死は絶対的であり、生は相対的である。

無が生に繋がる論理を構成するうえで豊かな示唆を与えているのはカントールのいう順序型 (Ordnungstypus)、ことに整列集合の順序型としての順序数 (Ordnungszahl) の概念である。無を、カントールの用いなかった空集合によって、しかも、「すべての順序数」という想定に付随する矛盾の成立を回避する形で、記号化しよう。すなわち、無を \emptyset という記号で表すとすれば、無を元とする集合 $\{ \}$ を考えることができる。さらに、 \emptyset と $\{ \}$ とを元とする集合を組み立てることができる。この操作を続けていくと、つぎのような集合の列が導かれるであろう。

$\emptyset, \{\emptyset\}, \{\emptyset, \{\emptyset\}\}, \{\emptyset, \{\emptyset\}, \{\emptyset, \{\emptyset\}\}\}, \dots$

こうした表記法ならびに順序数の構成法は数学者ノイマン (J. von Neumann) によって創始されたといわれているが、彼は \emptyset ではなく 0 を用いている。⁽¹⁾ 彼の説明にしたがって、いま少し詳しい説明を加えておこう。

まず、順序数 (OZ) は三つの標識によって定義される。第一に順序数

通常の記号法	0	1	2	3
体系的記号法	0	$0 \oplus 1$	$0 \oplus 1 \oplus 1$	$0 \oplus 1 \oplus 1 \oplus 1$
順序数	0	{0}	{0, {0}}	{0, {0}, {0, {0}}}

は「特定の整列集合」であること、第二に「すべての整列集合にはただひとつの相似的 (ähnliche) OZ が存在すること」、そして第三には「すべての順序数は先行するすべての OZ の集合を含んでいる」ことである。これらの標識が「包含順序 (Subsumtionsordnung)」に適用されて、順序数が構成される。彼の記号法では+が∪を、εが∈を意味しており、また、⊕という特殊記号も使われている。ここでも、それらを用いて順序数をつくることにする。

いま、記号 P が順序数を表すとすれば、 $P + \{P\}$ も順序数であることは容易に示される。⁽²⁾ この $P + \{P\}$ を、ノイマンは $P \oplus 1$ と表記する。したがって、「包含順序」においては最初の順序数は先行する元をもたない空集合 0 であり、 $P \oplus 1$ は P の直後に来る。{0} を 1 で表せば、0, $0 \oplus 1$, $0 \oplus 1 \oplus 1$, … の列ができあがる。この表記は、自然数の通常の表記 1, 2, 3, … にうまく具合に (1 がふたつで 2, 1 が三つで 3 といったように) 対応してくるので、上のような表が描かれる。もちろん、この表の作者はノイマンである。

この表について、とくに説明は不要であろう。注意しておくべきことは、各要素の間には順序数の定義により、

$$0 \subset \{0\} \subset \{0, \{0\}\} \subset \{0, \{0\}, \{0, \{0\}\}\} \subset \dots$$

という順序関係 (C) が組み込まれている点である。すなわち、順序数の構成が自然数の構造という形を生成させているのである。このばあい、無としての 0 の操作を試みているのは人間の技術的理性、すなわち構想力である。したがって、もっと一般的に、無の制作は構造を生成させるということができる。三木清の表現を用いれば、ここでは制作が同時に生成となるから、無は技術を通じて構造となる。しかし、無が否定されてしまえば、⁽³⁾ こうした生成の働きも不可能になる。その意味で無は絶対的である。⁽⁴⁾

[2] 目的論から機械論へ

数学者カントールが明らかにしたように、無限集合においては全体と部分と、また部分と部分とが同じ形 (数学者の用語では、同形) になる。この観点は重要である。無を有から区別する標識として、この観点を導入すれば、どのような議論が展開できるであろうか。これを目的論に準用してみよう。

目的論の論理的な根拠は、たとえば三木清が指摘しているように、部分と全体との関連のなかで部分を位置づけることであつた。⁽⁵⁾ すなわち、部分の意味は全体との関連で規定されうるのである。ところが、無ないし「無限」を想定したとき、この規定は無意味になる。というのは、全体と部分とは同じ形をもっているので、形という局面から両者は区別できないからである。したがって、無の「場所」(西田) ないし無の「世界」(三木) においては機械論的な世界観が成立することになる。無は機械論の根拠となるわけである。

[3] 絶対者から「絶対無」へ

無の論理は、人間にとって死の論理である。死から死にいたる過程に生が有る。人間を規定するすべての関係は死によって消去される。したがって、人間の産みだした絶対的な生、そうしたものとしての神や仏といった絶対者は死の中では消滅する。換言すれば、絶対者は無に転化する。西田

幾多郎流のいい方をすれば、死は「絶対無」を措定する。絶対者への信仰を国民的にもたない日本のような国では、無に仕える人格が絶対化されるのである。かつて生者であった死者への信仰は、たとえば祖霊信仰という形式で伝授されてきたが、そうした伝授の役割を果たす一種の「巫女」が天皇である。過去の夥しい死の累積に自己を同化させて、ひたすら無に奉仕するシャーマンこそが天皇という名称をもつ人格であった。かくして、天皇は絶対者を否定しつつ無の絶対化に献身する定めを負っているのである。⁽⁶⁾

[4] 「絶対無」から構造へ

つまるところ、「絶対無」はそれ自体としては無に帰するほかはない。つまり、それは否定されるべきものである。「絶対無」を否定するためには無から無への過程が媒介されなくてはならない。この媒介者は生を産む。したがってそれは「者」である。ここでは「者」は無と無とを関係づける能作を発揮する。無は対象化され、その結果として相対化される。無と無とを媒介する生は、他方では無によって断ち切れられ、それから媒介されなくてはならない。すなわち、生と生とは関係する。かくて「者」は生の構造となる。

(1) たとえば、彼の論文 'Über die Definition durch transfiniten Induktion und verwandte Fragen der allgemeinen Mengenlehre' in *Mathematische Annalen*, 99 Bd., 1928, 参照。

(2) 念のため、この証明を与えておく (*Ibid.*, S. 383). $Q \in (P + \{P\})$ より、 $Q \in P$ または $Q \in \{P\}$. 前者のばあい、 Q は順序数であって、 $Q \subset P \subseteq P + \{P\}$, 後者のばあい、 $Q = P$ であるから Q は順序数であって、 $Q \subseteq P + \{P\}$. なお、ノイマンは \subseteq とは異なる記号を用いているが、推論に本質的な違いはない。

(3) 三木清「構想力の論理」(『三木清全集』第8巻、岩波書店、1967年、所収)、7頁、参照。

- (4) 無を考へることがあたかも「東洋的」である、といった俗説が横行しているが、それは無を合理的に考察する立場の否定に繋がる。無をこうした立場から考へる端緒を与えたのは西田幾多郎であった。彼の哲学自体には多くの曖昧さが見られるが、彼の哲学する姿勢は重視されるべきである。そして、継承されるべきである。
- (5) 三木清「技術哲学」(『三木清全集』第7巻、岩波書店、1967年、所収)、第2節、参照。
- (6) 文学者の伊藤整は西洋のキリスト教的な神や仏教の仏に対比して「東洋的」な絶対者として「無」を想定している。たとえば、彼の著書『文学入門』(光文社、1954年)を見よ。確かにこの観点は「東洋」ではなく日本に限定して定められるとすれば有効ではあるが、しかし伊藤は「無」そのものを分析しようとせず、類型的な操作の手段として利用するにとどまっている。この点は、とくにいわゆる「白樺派」の作家たちの思想と行動との関連で重要な意味をもっているので、さらに言葉を加えておこう。

個人と人類、個人と自然などがいきなり登場して、個人と個人の関係の総体、したがって社会的なものが度外視されているところに、武者小路実篤に代表される「白樺派」の作家たちの思考様式の特徴があるようだ。社会が天皇制に規定されようが軍国主義に支配されようが、彼らははじめから社会を「超えて」いるので、その事実をたいして一向に問題関心を向けようとも思わない。むしろ軍隊も天皇も「程々に」是認しておくことで彼らは「超然と」モノを書いてきた。社会に媒介されることのないこうした思想もまたひとつのイデオロギーにちがいないが、それは「転向」不要のイデオロギーであった。この種のイデオロギーは「良心的」自然科学者のなかにもしばしば見受けられる。彼らもまた「超然として」一方では「平和」を唱え、他方では軍国主義の象徴となった天皇から「勲章」を受け取っている。伊藤整は「白樺派」の——もっと広く日本の「私小説」の——「思想」のこうした構造に気づいていたが、それを「東洋的」な類型として捉えたばかりで、さらに踏み込んだ洞察を展開しえなかった。残念なことである。

ついでながら、伊藤のいう「無」を日本のばあい限定して適用すれば、丸山眞男の問題設定とも切り結ぶ論点が出てくるはずである。丸山『忠誠と反逆——転形期日本の精神的位相——』(筑摩書房、1992年)、参照。

III 「無限」への道程

最後に、いくぶん感覚的な叙述によって——また、実際に暫定的なものにすぎないが——「無限」への見通しを立てておこう。

或る構造 Ω を包み込んだ構造 Ω が存在していることは Ω の中にいる観察者には分かっているが、どの程度であれ Ω のことが分かるためには、 Ω との類似（アナロジー）ないし Ω で可能な形式化（もっと狭く、デジタル化）が必要不可欠であるとともに唯一の手段でもある、そんな状況を想定しよう。

そのばあい、哲学者たちは Ω の全貌を把握するためにいかなる手だてを用意してきたであろうか。たとえば、カントは Ω の認識の不可能であることを推定して Ω を曖昧で、知見の及びがたい存在——「物自体」——と見なした。しかし、ヘーゲルはドイツ語による「文」と、「文」を構成する言語「要素」に、 Ω でない Ω の場所に向けて旅をさせ、或る種の「使命」を「強制」したのである。たとえば、Sein という語に φ という「使命」を「強制」するとしよう。それを、 $\text{Sein} \vdash \varphi$ と表すことにする。そのとき、この「強制」関係の不可能性は $\text{Sein} \vdash \neg \varphi$ と表現される。ところで、Sein に或る限定を加えた Dasein なる語が導入されるならば、 $\text{Sein} \vdash \varphi$ は「 $\text{Dasein} \vdash \varphi$ でない」という内容を予示しうる。そこであらためて $\text{Dasein} \vdash \varphi$ または $\text{Dasein} \vdash \neg \varphi$ の論じられる場所が生成する。この場所において $\text{Dasein} \vdash \neg \varphi$ の可能性が顕現したとき、さらに多くの限定が再び否定 (\neg) の保存を予示することになる。この「運動」は形式的にはいつまでも続くのであるが、ここで注目されるべき点はその「運動」の持続する根拠である。ヘーゲルの推論においては、上述のように、いわゆる排中律が「予示」という形でしか成り立たないから、推論の「運動」——弁証法！——は途切れることなく進むのである。弁証法を媒介にして多彩に組

み換えられる言語構成を通じてヘーゲルの「精神」は ∞ のいたるところで「食指」を動かしたのち、把握の「完了」をいきなり——没論理的に一方的な形で——宣言した。たとえば、『精神現象学』の最終章「絶対知」や『論理学』の最終章「絶対的理念」はその宣言の証しにほかならない。⁽¹⁾ヘーゲルは、 ∞ の言語に対して或る順序をつけてその意味を規定し、続いて今度は規定を除去する、という操作を繰り返して実行し、 ∞ の構造の「全体」認識に迫ろうと試みたのである。彼の観念的冒険の成否についての評価はともかく、 ∞ にも ∞ と同じ構造が隠されていてその構造は ∞ の「文」によって表現できると想定した彼の視角は今なお有効な意味をもちうるように思われる。

他方、数学者たちはこの種の ∞ を「無限」とか「宇宙」という言葉で表している。 ∞ の中の ∞ と異なる場所に越境して、 ∞ で慣れ親しんだ方法を少しずつ手さぐりで ∞ の認識に適用しようとしたのがヒルベルトであった。その方法が「有限の立場」とよばれていることはすでに言及した通りである。 ∞ の「内側」のやり方を踏襲して ∞ の「外側」に認識可能な対象を「構成」したのはゲーデルである。彼の方法の手堅さは「構成的集合」という名称に象徴されている。そしてコーエン (P. Cohen) は ∞ の「内側」で作られた「文」を駆使して ∞ とその「周辺」(真に ∞ なる場所を含む、 ∞ の拡大した場所 ∞^+)の構造を表現する方法を考案した。コーエンの試みはヘーゲルがみずから「生成」させた言語の組み立て——その意味での、叙述——によって構成しようとした像型を、「生成的」集合の要素を操作する数学者流の概念構成法を通じて描いて見せたのである。実際に、ヘーゲル的推論のコーエン流解釈はすぐ上で試みられたばかりである。

ところで、哲学者や数学者の卓越した知的営みにもかかわらず、「無限」や「宇宙」と称される場所は依然として暗黒のままに現前している。人間の直面している闇、しかしいかにしても捉えどころのない闇は果てしなく、

深く広く続いているように見える。人間は、原始時代と同じく、そこを目掛けて肉体的かつ精神的な「投企 (Entwurf)」を試みるほかに生き抜くすべを見出しえないかのごとくである。もちろん、「投企」の手段となりうるのは哲学者や数学者の案出したカテゴリーや「形式的体系」だけに限られない。存在論的傾向をもつ作品世界を創造している文学者たちもまた、彼らに特有のやり方で感性的世界の中に Ω^+ を把捉するための自己流の方法を構築してきた。その意味で代表的な日本の文学者を例にとろう。あの梶井基次郎は小品『闇の絵巻』において、暗闇を疾駆する強盗のエピソードについて語り、闇に探りをいれるために強盗が手にしていた「一本の棒」に象徴的意味を賦与している。しかし、別の作品で彼は「光」もまた闇でありうることを示唆している⁽²⁾。そのとき「一本の棒」たりうるモノはなんであろうか。明言していないが、「棒」は自由に意味を発する「私」という抽象的構造に転形するのだ、と梶井は囁いているように思われる。また、埴谷雄高は「形而上小説」といわれる未完の大作『死霊』の中で、「未出現宇宙」の存在する「音」を伝える「死者の」—— $\dot{\cdot}$ した $\dot{\cdot}$ が $\dot{\cdot}$ う $\dot{\cdot}$ て、存在の——「電話箱」を構想している⁽³⁾。彼は、「出現宇宙」の隙間を通してその「外側」から流れてくる存在の「音」に耳を澄ましているのである。他方、 Ω から Ω へのヒルベルト的な思考経路に類似した形で「無限」が文学に取り入れられている事例は、中里介山の思想小説『大菩薩峠』に見られる。介山自身が名づけた「大乘小説」という名称に示唆されるごとく、そこでは絵経や変文に由来する絵巻物の構造が小説の形式に移し換えられている。すなわち、日本社会の多様な出身階層から合成される人物群が循環的な構造に組み込まれ、数珠つなぎになった場面場面の中で動き回っているのである。したがって、小説のストーリーは循環的な軸心を根幹として構成されるので、いつまでも終わることはない(実際に、『大菩薩峠』は未完成である)。12世紀の作といわれる、あの『鳥獣人物戯画卷』の数

歴史の構造

巻が、一種の循環的な流れにそくして描かれた有限の空間世界に対し時間的順序に応じて（擬人化された）動物のムレを配置しているのとまったく同様である。いずれも、有限の循環構造を「無限」に「連続」する「運動」へと拡張しているのである。

まぎれもなくわれわれの目の前で、無の生成する場所が動いている。「無限」の、「連続」の、そして「運動」の、音にならぬ音がそこから聞こえてくる。しかしその音を確実に聞き分けるグローバルな方法はいまだに発見されていないし、他方では、その方法を見つけようとしてシーシュポスの努力を積み重ねている人間の存在そのものも危うくなりつつある。歴史の構造を生成させているのは、そのような場所とそのような人間である。

- (1) 私はここで具体的な引用や文献考証を差し控えよう。そのためには別の論文を用意する必要があるから。
- (2) 1928年に発表された作品『蒼穹』を参照。
- (3) 『死霊』第五章「夢魔の世界」を見よ。